南斉上定林寺僧柔について

春　日　礼　智

南斉（四七九―五〇二）は、太祖高帝の建元元年四月建国して、和帝の中興二年三月、梁に禅るまで、前後二十四年、六朝中、最も短命の王朝であつたが、しかも、その間、高帝の系譜をつぐ前半と、高帝の兄始安貞王道生の系をつぐ系脈の交代があり、高帝に、かの有名な

宋氏[1]、若、非骨肉相残、他族豈得乗其弊。汝深誡之。

の戒しめがあつたにもかかわらず、斉室もまた、骨肉の争いに依つて、滅亡したのである。南斉の極盛は、高帝[2]、武帝[3]、特に武帝代が、最も充実[4]していた。そして、南斉の仏教も、この頃が、最も、活気に満ちていた。高僧伝巻八・僧柔伝に、

斉太祖創業之始、及世祖襲図之日、皆、建立招提。

というのが、ほぼ、その間の事情を物語つている。世祖は武帝である。武帝は高帝の長子で、剛毅果断、富国を先とし、晩に仏法を信じ、永明の世、百姓豊楽、賊盗屏息したといわれた明君であつた。その長子文恵太子[5]、追尊文帝、次子竟陵[6]文宣王蕭子良は、倶に仏教を好んだので、この時、南斉の仏教もまた、極盛に達した。子良は、

子良篤好釈氏、招致名僧、講論仏法。道俗之盛、江左未有。或、親為衆僧賦食行水。世、頗以為失宰相体。[7]

と、言われた人である。僧柔の出世は、実に、この頃であつた。

南斉は、南北朝時代としては、珍しく、南北交戦のない時代であつた。そして、南斉の仏教もまた、晋宋の外、北方、羅什の翻訳と、その教学の影響を受け、多彩であつた。従つて、その短かい期間にも、定林上寺法献、長干寺玄暢らの僧主の外、正観寺求那毘地、中興寺僧鍾、天保寺道盛、霊根寺法瑗、上定林寺僧遠、竹林寺僧慧、上定林寺僧柔、法華寺慧基、謝寺慧次、何園寺慧隆、霊曜寺志道、安楽寺智称、安楽寺僧弁ら多数の名僧高僧が輩出している。中でも、定林上寺僧柔は、

当時[8]（宋末）柔次二公、玄宗蓋世。

とか、

斉[9]時、重僧柔。影毘曇、以講論。

と言われた人で、謝寺の慧次と名コンビであり、南斉を代表する高僧であつた。其故、天台大師は、その著法華玄義巻十上に、特に、この二人に言及し、

三者定林柔次二師、及道場観法師、明頓与不定、同前。更、判漸、為五時教。

と、述べている。

僧柔[10]（四三一—四九四）は宋の文帝の元嘉八年に生れ、南斉海陵王の延興元年に、六十四歳で死んでいる。姓陶、丹陽（江蘇省鎮江府）の人である。少にして耿潔、出塵の操あり、九歳、叔父に随つて遊学した。家は代々貧窮し、あかざや豆の葉のような粗末なものも、食べられないくらいであつた。しかし、彼は、それにも屈せず、篤志いよいよ堅く、窮を履んで、改むることがなかつた。後、出家して、弘称という人の弟子となつた。弘称については、詳しいことはわからないが、高僧伝に依れば、

姓呂。洛陽臨渭人。学通経論、声誉早彰。

とあるから、相当の人であつたらしい。僧柔は、この人について勉強し、戒品をまもり、禅慧をつくし、方等の諸経、大小の諸部は、皆、玄源を徹鑒し、宗要を洞尽した。

年、弱冠を過ぎ、講席に登るや、一代の名賓も、皆、投身、北面した。

後、東の方禹穴（浙江省紹興県宛委山）に遊び、慧基法師にであつた。これは、彼にとつて、大きな収獲であつた。慧[11]基は名僧伝巻七には、山陰城傍寺慧基と記してある人で、城傍寺は、高僧伝巻十二、誦経篇・超弁伝に、

頃之、東適呉越、観矚山水、停山陰城傍寺。少時後、還都、止定林上寺。

とあるもので、このコースは、此以後、僧柔の選んだコースと同じである。慧基は、宋の高僧祇洹寺慧義の弟子という名門の出で、小品法華思益維摩金剛般若勝鬘等の諸経を善くし、法華義疏三巻を著わし、東土僧正の始めと言われた人である。南斉明帝の建武三年（四九六）八十五歳で、城傍寺で卒している。僧柔は、慧基の招きに依り、城傍寺で、一夏講論したが、これは、彼の終生の大収穫であつたと思われる。

彼は、次いで、剡（浙江省嵊県）の白山霊鷲寺に入つている。この霊[12]鷲寺は、晋代、剡の白山于法開が住し、支道林と即色空義を論争した寺である。僧柔は、ここで、宋代、既にすばらしい教化の実を挙げている。

宋禅り、南斉の高帝、武帝、盛んに寺を建て、義士を招く。その時柔は既に、教界の耆旧であつた。依つて、文宣等の諸王が、再三召した。ために、僧柔は、都建康、今の南京に出て、定林上寺に止まり、南斉仏教界の元匠となつた。四遠欣

服し、人神みな賛美したとあれば、その徳化の大、推して知るべきである。定林寺は、金陵梵刹志巻十に、

在郭城高橋門外北。去正陽門三十里。……宋乾道末年、秦高僧善鑑創。按、上定林寺、在鍾山。寺廃。因、請其額于此、遂名定林。

とあるが、此は、民国朱偰の金陵古蹟図考に出てくる江寧県土山鎮の遙か南、方山の上定林寺で、鍾山の上定林寺ではない。僧柔のいた鍾山の上定林寺は、紫金山の南の中腹にあつたもので、高僧伝巻三・曇摩蜜多伝には、次のように、建寺の由来が、詳しく述べられている。

元嘉十年還都、止鍾山定林下寺。蜜多、天性凝靖、雅愛山水。以為、鍾山鎮岳、将美嵩華。常歎。下寺基構、臨澗低側。於是、乗高相地、揆卜山勢、以元嘉十二年（四三五）斬石刊木、営建上寺。士庶欽風、献奉稠畳。禅房殿宇、欝爾層構。於是、息心之衆、万里来集。諷誦粛鴛、望風成化。

その荘厳、眼前に見えるようである。定林上寺には、南斉時代、僧柔の外、僧遠、法献、道嵩、超弁らの高僧がいた。

永明七年（四八九）十月、南斉仏教の極盛を誇る事件があつた。それは、竟陵[13]の文宣王が、京師の碩学名僧五百余人を集め、定林寺僧柔、謝寺慧次をして、普弘寺に於いて、成実論を開講せしめたことである。此に依つて僧柔、慧次は勿論、南斉仏教の中心が、成実論研究にあつたことが知られる。成[14]実論の研究は、宋代に始まり、南斉を経て、梁代益々隆盛を極めた。永明七年十二月、文宣王は、更に、僧柔、慧次らの諸論師をして、抄成実論記九巻を撰せしめ、翌年正月二十二日解座。汝南の周顒が抄成実論序を作つた。その序は、今も、出三蔵記集巻十一に収められている。

僧柔は、成実学者でありながら、西方願生者として知られている。臨終の日、余病なく、弟子に

「吾、逝かん。」

と言つて、席を地にしき、西向虔礼、奄然として終つた。南斉では、僧柔の外、西方往生を願つた人に高座[15]寺慧進がある。僧柔の遺骸は鍾山の南に葬られた。沙門僧祐は、久しく僧柔の道友だつたので、碑を墓所に立てた。東莞の劉勰が、その文を製した。出三蔵記集巻十二には、劉勰の文として、次の二つの碑銘が載っている。

鍾山定林上寺碑銘一巻
僧柔法師碑銘一巻

最後に、僧柔の門人としては、次の人々の名が知られている。

(一)僧紹[16]
(二)梁[17]楊都光宅寺法雲（四五七―五二九）
(三)梁[18]鍾山開善寺智蔵（四五八―五二二）
(四)梁[19]余杭西寺法開（四五九―五二三）
(五)梁[20]楊都荘厳寺僧旻（四七四―五三四）

(六)山陰招明寺法宣尼[21]（四三四―五一六）

(七)楽安寺慧暉尼[22]（四四二―五一四）

右の中、法紹は貞正、学業あり、法雲、智蔵、僧旻は、梁の三大法師として、次の時代を担う英傑である。即ち、僧柔の枝葉は、梁代に至つて、いよいよ繁茂していることがわかる。これは、梁の元帝が指摘した[23]、南斉文宣王の十一人の文学を好む友が、皆、梁朝の武帝以下の英傑であつたことを思えば、南斉文化の影響が僧俗共に、梁代のそれに、如何に深いかかわりがあつたかが、理解されると思う。

1 資治通鑑巻一三六・永明二年の条。

2 南斉書巻一、巻二、南史巻四、建康実録巻一四、巻一五、通鑑巻一三二―一三五、全上古三代秦漢三国六朝文・全斉文巻一、巻二。

3 南斉書巻三、南史巻四、建康実録巻一四、巻一五、巻一六、通鑑巻一三四―一三八、全斉文巻三、巻四。

4 南斉書巻一八、冊府元亀巻二〇二に依れば、永明九年に甘露が降り、四十余日つづいた。

5 南斉書巻二一、南史巻四四、建康実録巻一五、通鑑巻一三五―一三八、全斉文巻六等。

6 南斉書巻四〇、南史巻四四、通鑑巻一三五―一三九、文選巻三〇所収南斉文宣王行状、古今図書集成神異典釈教部巻六六、全斉文巻七。

7 通鑑巻一三六、南斉書巻四〇参照。

南斉上定林寺僧柔について（春　日）

8 続高僧伝巻五・智蔵伝。

9 同上僧旻伝。

10 高僧伝巻八、名僧伝巻七、往生集巻一、仏祖統紀巻二七。

11 高僧伝巻八、名僧伝巻七、大宋僧史略巻中、仏祖統紀巻三六、釈氏稽古略巻二。

12 高僧伝巻四・于法開伝。

13 出三蔵記集巻一一所収僧祐撰略成実論記。大宋僧史略巻上・解論の条、出三蔵記集巻五、続高僧伝巻五・僧旻伝参照。僧史略は、僧柔、慧欣とし、僧柔は定林寺、慧欣は普弘寺にて講ずとす。……。

14 東方学報第十四冊第二分の拙稿「支那成実学派の隆替について」参照。

15 高僧伝巻一一、浄土往生伝巻上、往生集巻一。

16 高僧伝巻八・僧柔伝。

17 続高僧伝巻五・僧旻伝、同法雲伝。

18 同、僧旻伝。

19 同上、同巻六・法開伝。

20 同巻五・僧旻伝。

21 比丘尼伝巻四。

22 同上。

23 金楼子巻三。